

満洲文字の文字表をめぐって(7)
—女真語と満洲語の bi と fi と pi—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：今回は、まず「満文原檔」の無圏点満文の b と p について検討しました。「満文原檔」の本行の無圏点満文では、b と p の字形は区別されませんが、行間の補筆訂正の文に有圏点新満文の p がでてきました。この p の字形は興味深いもので、ガリック文字を利用すれば済むところを、そのようにはせずに、独自の工夫をこらし一画追加して p の字形を作ったようにみえます。

吉池：次いで「満文原檔」の無圏点満文の f と w について検討しましたね。「満文原檔」の本行の無圏点満文では、f と w の字形は区別されません。無圏点満文の ㄨ と ㄨ が原型であり、有圏点新満文はその原型の ㄨ と ㄨ に、1画を足した形で ㄨ と ㄨ を新たに作り、a, e の前の f と a, e の前の w を区別したことを確認しました。もっとも、 ㄨ と ㄨ の右に突き出た部分は連書されていると見るのが自然ですから、これを“プラス1画”と表現するのは適当でないかもしれませんが、字形の上で1画増えたように見えるものを、プラス1画と呼ぶことにして、このプラスされた1画は、圏 (◦) や点 (・) のプラス1画と、同じ作用をすると思いました。原型が無標で、プラス1画が有標です。このプラス1画が、有圏点新満文を作成する方針のように理解できる、とのことでした。

中村：最後に bi と有圏点新満文の fi について検討しました。「満文原檔」無圏点満文には fi という音連続に相当する文字連続はなく、bi で表記します。なぜこのような現象がおこるのか、大きな問題です。①「満文原檔」の無圏点満文と、有圏点新満文とでは、方言が異なっていてそれが反映した、もしくは、②同一方言内に存在する異読(文章語音と口頭語音、老人の発音と若者の発音などの違い)に起因するという可能性を検討しましたが、手もとにある他のツングース諸語の資料や、満洲語の方言の資料によるかぎり、①方言や②異読を支持する資料は見あたらない、ということでした。

吉池：「満文原檔」の無圏点満文の動詞語尾 -bi の一部は -pi [p^hi] であることにより、pi が fi となったとする見方もありますが、有圏点新満文の -pi の諸例をみると“状態を表す動詞”が大半を占めるので、あるいは他のなんらかのメカニズムが働いているのではないかと疑われます。

中村：それで次回は、明代と金代の女真語の bi や fi を確認してみようということでした。

まずは明代女真語の bi と fi から検討しましょう。

明代女真語「女真館訳語」

吉池：明代には、書物の「女真館訳語」と碑文の「永寧寺碑」があります。明の成祖の永楽五年（1407）に諸民族語の通訳官の養成と外交文書の翻訳のため四夷館が設立され、そこで作られた女真文字・女真語の語彙集「雑字」（図1）と例文集「来文」（図2）があり、両者を合わせて「女真館訳語」もしくは「女真訳語」とよびます。

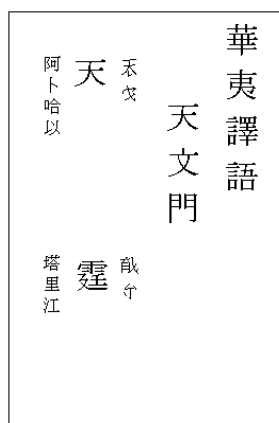


図1「雑字」冒頭の翻字

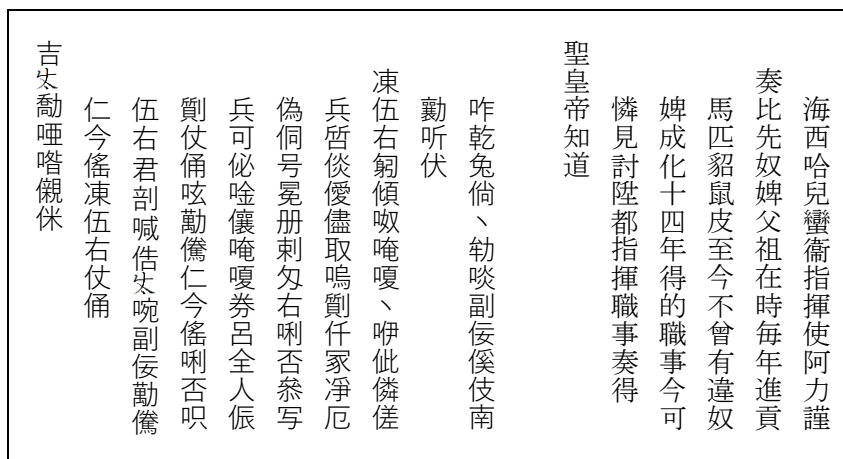


図2「来文」第17通の翻字

「雑字」全体の構成は、天文門、地理門、時令門、花木門など内容別になっています。1行目に女真文字で書かれた女真語の単語や連語があり、2行目に女真語の意味を表した大書した漢語があります。3行目に女真文字・女真語の発音を漢字で音写した注記があります。これでワンセットであり現存するものは 917 セットとなります¹。「雑字」の内容は、

¹女真文字はウェブ上のフリーフォントによる。一部作字した。なおこのフォント

Kiyose, G. N. (1977)²により、道爾吉・和希格(1983)³や愛新覺羅烏拉熙春(2009)⁴を参照します。なお便宜的な措置ですが、女真語は女真文字ではなく、それに付された漢字音注により提示することにします。

中村：ところで図1の「雑字」冒頭をみると、𐰺 abxa(天)だけでいいところ、次のように属格語尾𐰾-i(の)が付いています。語彙集にしては奇妙ですね。

女真語	漢語	漢字音注
𐰺𐰾	天	阿卜哈以 abxa(天)-i(の)

吉池：「雑字」中の名詞や動詞に各種の語尾が付いているものが少なくありません。これはおそらく、例文集である「来文」の中から、語尾付きで単語を抜き出し、単語・連語集である「雑字」に収めたものでしょう⁵。

中村：「雑字」中の単語や連語に付された語尾の機能を「雑字」のみによって決定することは、道理のうえからみて、できないはずで、とくに動詞語尾の機能の決定はむずかしい。しかし、どのような音節が使用されているかということについては参考になります。「満文原檔」無圈点満文には fi という音連続に相当する文字連続はなく、bi で表記します。明代の女真文字女真語で bi と fi がどのように出るか興味深いところです。

「雑字」中の bi、fi など

吉池：「雑字」は、女真文字女真語、女真語の漢字音注、女真語の意味、以上の三つから成っていますが、以下においては、先に述べたように女真語は漢字音注とローマ字転写で提示することにします。女真文字を提示する必要があるばあいは()を付して提示します。府(众)とするばあい众の漢字音注が府であることを示し、伏塞(售伏塞)とするばあい售の漢字音注が伏塞であることを示します。Kiyose, G. N. (1977)、道爾吉・和希格(1983)、愛新覺羅烏拉熙春(2009)の注記を、それぞれ清 1977、和 1983、愛 2009 と略称します。

Jurchen(2002)は、金啓孫『女真文辞典』文物出版社 1984 年に基づいて作成されたものとおもわれる。現在は削除されており参照することはできない。

² Kiyose, G. N. 【清瀬義三郎則府】(1977) *A Study of the Jurchen Language and Script*. Kyoto: Hōritsubunka-sha.

³ 道爾吉・和希格(1983)『女真譯語研究』内蒙古大学学报増刊。道爾吉氏は「女真語音初探」1-241 頁、和希格氏は「女真館雑字・来文研究」242-435 頁を担当。本対談は和希格氏の記述による。

⁴ 愛新覺羅烏拉熙春(2009)『明代の女真人 『女真訳語』から『永寧寺記碑』へ』京都大学学術出版会。

⁵ 「女真語と女真文字」、吉池孝一・中村雅之・長田礼子 2020 『女真語と女真文字 付碑文拓本 10 種画像(JPEG)』(古代文字資料館) 4-16 頁所収参照。

中村：まずは f を含む単語から確認しましょう。

f を含む単語

吉池：f-を含む単語は次のとおりです。

■ fa, fo, fu, fi (動詞語尾以外の fi)

064. 法答岸 fadan	墻	有圈点新満文 fajiran(壁)
107. 縛約莫 foyo mo	李	foyoro(すもも)
053. 府(众)fu	府	fu(府)
221. 伏塞(售伏塞)古 fushegu	扇	fusheku(扇)
139. 阿非(儂)afi	獅	arsalan(獅子)
224. 非(允)fi	筆	fi(筆)
243. 非刺(周非刺)fila	楪	fila(皿)
245. 忽非(允)hufi	壺	tampin(つぼ)
247. 非(儂)本 fibun	燈	dengjan(灯)
248. 阿洋非(儂)本 ayan fibun	燭	ayandengjan(ろうそく)
503. 非撒(俺非撒)fisa	背	fisa(せなか)
579. 阿洋非(儂)本 ayan fibun	蠟	ayandengjan(ろうそく)
・ 248 と重複		
791. 非(允)也吉木本刺 fiyegi mubunla 偏裨(commander)		
・ 清 1977 は “commander” とする。		

新增

022. 非如(晰非如)兒 fiḵur	神	?firumbi(呪う、神に祈る) と関係あるか。
---------------------	---	------------------------------

■ 動詞語尾の fi

468. 扎失非(允)ḵašifi	分付(命令する)	jasimbi(手紙を出す)
・ 動詞語尾-fi の諸解釈：清 1977 に特段の記述はない。和 1983 は「同満語的 fi」とし、愛 2009 は「分離副動詞語尾-fi」とする。和 1983 と愛 2009 は有圈点新満文の連用法の-fi にあてるようである。		
829. 斡非(儂)ofi	爲	ombi(なる、為し得る) *ofi(…なので)
・ 福田昆之(1987)にみる満文 ofi の解説には「ombi の非限定の副動詞であるが、助詞化している。		

「～なので」と訳されるのがふつうである。」⁶とある。

- ・清 1977 に孺 fi について特段の記述はない。
- ・和 1983 に孺 fi について特段の記述はない。
- ・愛 2009 は fi を分離副動詞語尾とする。

中村：女真語 fa, fo, fu, fi の f は漢字音からみて唇歯音 f であることは明らかです。fi という音連続ですが、語頭、語中、語末の音節に出てきます。なお、語末の音節においては動詞語尾として fi は 2 例みえます。このような f を含む音連続の存在は、有圈点新満文と同じです。無圈点満文の本行（行間の訂正文には有圈点新満文の文字法が反映される傾向があるので除く）には fi に相当する文字連続はないようなので、この点は明代の女真語と無圈点満文とは異なります。

bi にはどのようなものがあるのでしょうか。

bi を含む単語

吉池：bi を含む単語は次のとおりです。

■動詞および動詞語尾以外の bi

		有圈点新満文
004. 必阿(咆必阿)bia	月	biya(月)
040. 必阿(彪必阿)bia	河	bira(河)
・清 1977 必刺の誤とする。		
151. 朶必(哮)卜嫩 dobi bonon	猿	bonio(猿)
153. 朶里必(菴朶里必)doribi	狐	dobi(狐)
183. 失別(脩)洪 sibihun	燕子	cibin(燕)
216. 必忒黑(卑必忒黑)bitehe	書	bithe(文書)
308. 素温必(哮)因 sunbin	總兵	
784. 秃必(哮)巴忒屯 tubiba tetun	綱常(obligation)	
・清 1977 は“obligation”とする。		

新增

044. 必忒黑 bitehe(卑)	文	bithe(文書)
--------------------	---	-----------

■動詞の bi-

473. 別(兵)厄卓幹卜連 biye ĵurburen 有違	bimbi(有る), jurcen(違反)
・清 1977 は漢語の語順と指摘	

⁶ 福田昆之(1987)『満洲語文語辞典』横浜市：FLL による。

614. 別(兵)弗脉(𠵼弗脉)阿木魯該 bifume amurugai
 在後 bimbi(有る), amargi(後方)
 ・愛 2009 は-fume を「使役・受動態非完了副動詞語尾-fumə(𠵼)」とする
704. 別(兵)厄 biye 有 bimbi(有る)
776. 愛因別(兵)赤巴勒 ain bičibale 務要 ainu(いかに), bimbi(有る)
 ・清 1977 は、「This word consists of *ain* ‘how’ plus *bi-* ‘to be’ with suffixes *-čiba*(concessive) and *-le*(locative).」とする。愛 2009 は、本連語を「漢語の語義による寄せ集め」というグループに入れる。
806. 別(兵)厄塞因別(兵)biye sainbi 有益 bimbi(有る)
 ・清 1977 は漢語の語順と指摘する。

■動詞語尾の-bi

352. 哈察別(脩)hačabi 見 acambi(会う、会見する)
 ・清 1977 は、「The ending *-bi* is the nonperfective indicative verbal suffix;cf.Ma. *-mbi*」とする。
 ・和 1983 は、「*bie* 原形, 同満語的 *mbi*」⁷とする。
 ・愛 2009 は、「分離副動詞語尾-bi」とする。
 これによると、清 1977 と和 1983 は、有圈点新満文の終止法-*mbi* にあて、愛 2009 は連用法の-*fi* にあてているようにみえる。なお、動詞語幹+動詞語尾-*bi*/*-bie* は「雑字」中に他に 21 例あるがここでは省略した。清 1977 と和 1983 と愛 2009 の、他の 21 例に対する動詞語尾の解釈は、上記と同様である。
737. 該別(脩)秃番 gaibi tufan 將就 gaimbi(取る), ?tuhen(結果)
 ・清 1977 は漢語の語順と指摘し、*bi* を動詞語尾とする。「the verbal suffix *-bi*, which corresponds to Ma. *-mbi*, in *gaibi* denotes nonperfective indicative,」。tufan の解釈はないが、或いは有圈点新満文の *tuhen*(結果)に相当する語か。
741. 八哈別(脩)埋因 bahabi main 享祿 bahambi(得る), fulun(俸祿)
 ・清 1977 は漢語の語順と指摘し八哈別を動詞とする。「Ditto. Cf. Ma. *baha-* ‘to obtain.’」
773. 答別(脩)刺魯 dabilaru 備寫 ?dambi(掌る), ?刺魯
 ・和 1983 は漢語の語順と指摘し答別を動詞とする。「動、名詞位置顛倒, 直譯漢字。」
775. 安察別(脩)番住昧 amčabi fonjumei 追求 amcambi(追う、追問する), fonjimbi(問う)
 ・清 1977 は、二つの動詞は漢語の語順に配置されていると指摘し「the first verb is the indicative form, and the second is a converb.」とする。*bi* を直接法(indicative)の語尾とし、*mei* を連用形(converb)の語尾とする。「fonjumei amčabi」とあるべきところ語順が逆転し非文法となっていると

⁷ 和 1983 は、脩を通常は *bie* 転写するが、*bi* と転写することもある。

いうことであろう。

・和 1983 は、本連語を満洲語の「amɣamə fonɕimbi」に当て「意味が重複し漢字を直訳する」（意思重畳，直譯漢字。）とする。動詞語尾についての解説はないが、下に出す 819 の解説によると、動詞語尾を変更すれば女真語の文法に合うということであろう。

・愛 2009 は、本連語の amɕabi の bi は「分離副動詞語尾-bi(俑)」とし、fonɕumei の mei は「非完了副動詞語尾-mai(右)/-mei(伏)」とし、「動詞の形態が女真語の文法に合わない」というグループに入れる。女真語としては amɕamei fonɕubi とすべきであるということであろうか。

819. 瑣迷別(俑)忒別(兵) somibi tebi 潜居 somimbi(隠す) tembi(住む)

・清 1977 は、「Ligeti has *somibe.」とする以外に特段の言及はない。

・和 1983 は、本連語を満洲語の「somimə tɕmbi」に当て「“俑”應改爲現在形“右”」とする。和 1983 は“俑”を現在終止形（「雑字」では“原形”と呼ぶが「来文」では「現在終止形」と呼ぶ）とするので、このままでは文法に合わない。そこで俑を連体形の右に変更すべきであるとする。

・愛 2009 は、本連語の somibi の bi は「分離副動詞語尾-bi(俑)」とし、tebi の bi も「分離副動詞語尾-bi(俑)」し、「動詞の形態が女真語の文法に合わない」というグループに入れる。女真語としては somimei tebi とすべきであるということであろうか。

831. 兀魯勒別(兵)urulebi 准 urulembi(同意する)

・清 1977 には兵 bi について特段の記述はない。

・和 1983 には兵 bi について特段の記述はない。

・愛 2009 は、兵 bi を「動詞現在時語尾-bi」とする。

中村：これをみると、bi という音連続は、語頭、語中、語末の音節に出てきます。この点は、無圈点満文や有圈点新満文と同様です。なお動詞語尾として-bi が多数ありますが、三氏の解説には、くい違いがあり問題になりそうです。

吉池：たしかに動詞語尾-bi の機能については問題があるのですが⁸、いまは触れなくとも議論を進めることはできるので、別の機会に検討したいとおもいます。

中村：明代女真語の bi と fi の状況の概略はわかりました。金代女真語の bi と fi の状況はいかがでしょう。

金代女真語の bi と fi と pi

吉池：女真語研究の基本書である金光平・金啓琮(1980)⁹は、俑 bie、兵 bie、允 fi、僞 fi

⁸ 動詞語尾-bi を、Kiyose, G. N. (1977) と和希格(1983)は終止形とするが、愛新覺羅烏拉熙春(2009)は連用形とするなど、問題はいくつかある。

⁹ 金光平・金啓琮(1980)『女真語言文字研究』北京：文物出版社。

とし、金代碑文の女真文字に脩 bie、兵 bie、允 fi、爾 fi を付しますが、それは明代の女真文字女真語の漢字音注を利用したものにはすぎず、金代女真文字の音の詳細を知ることができません。

中村：金代女真語の音を知るには、①金代碑文の中の女真文字で表記された借用漢語によるか、②『金史』などの史書に漢字の音を利用して記されている漢字音写女真語によることとなります。①については女真文字女真語と漢文が合璧となった碑文「大金得勝陀頌碑」などを利用するのですが、確度の高い一定数の語彙を抽出することは容易ではないでしょう。②については女真語研究の初期より利用されています。比較的新しいものとしては孫伯君(2016)¹⁰としてまとめられているようですが。

吉池：孫伯君(2016)は、『金史』や『金史・国語解』などにより、金代の漢字音写女真語を209語集めています。それに依って「金代女真語輔音表」(115頁)を作っており、下記のとおりです。

清不送氣	p	t	k	q
濁不送氣	b	d	g	
清		s	š	h
濁				ɣ
清不送氣			č	
濁不送氣			j	
濁	m	n		ŋ
濁		l		
濁		r		
濁	w		y	

中村：破裂音の p, t, k と b, d, g、破擦音の č と j は“気音の有無”と関係なく、“清と濁”で対立させていますが、その根拠は何でしょう。

吉池：根拠は明示しません。p, t, k, č には無声有気音の漢字を当て、b, d, g, j には無声無気音の漢字をあてるのがふつうなので、気音の有無で対立していたと理解しても不都合はないはずですが。ここでは、破裂音と破擦音の音質の詳細は問わないこととして、上の表を用いて議論をすすめることにします。

¹⁰ 孫伯君(2016)『金代女真語』北京：中国社会科学出版社。もと孫伯君(2004)『金代女真語』遼寧市：遼寧民族出版社。

中村：209 語ですか。網羅的ではないので、確かなことは言えませんが、p はあるけれども f はない、とみてよさそうですね。

吉池：209 語中に、唇歯音の漢字音 f-は 2 例にしか（この 2 例については後で検討します）使用されておらず、次に提示するように、当時は無声有気音の両唇閉鎖音 [p^h] であった漢字が使用されており、それが後代の満洲語の f-に対応します。これにより、金代女真語に p はあったけれども f はなかった。その p が、明代女真語では f に変化していた、と想定しても大過はないようです。

金代女真語の p の使用例

吉池：さて、孫伯君(2016)は 209 語について諸資料により詳細な説明を付します。その中から、『金史』や『金史国語解』などの主なる資料における用例、および、対応する満文をあげると次のとおりです。

語頭の p

- (1) 盤_(並母)里合(仆里黑、跋里海) parha。金史：人名“仆里黑、跋里海”。金史国語解：“盤里合，將指”（おやゆび）。満語：ferhe(おやゆび)
- (2) 裴_(並母)滿 poimon。金史：姓氏。金史国語解：“裴滿曰麻”。満語：fomorombi(木綿や麻がもつれる)の語幹 fomo。
- (3) 婆_(並母)盧火 porho。金史：人名。金史国語解：“婆盧火者，槌也”。満語：folho(かなずち)。
- (4) 蒲_(並母)阿 puḡa。金史卷 112：“移刺蒲阿本契丹人”、金史国語解：“蒲阿，山鷄”。満語：ulhūma(キジ)。満語と音形が離れるため孫伯君(2004)は契丹語とする。
- (5) 蒲_(並母)答 puda。金史：人名。女真訳語・人事門：“弗忒昧，送”。満語：fudembi(送る)
- (6) 蒲_(並母)帶 pudahi。金史卷 59：人名。語根 puda+完了語尾 hi。意味は“已送”（送った）。満語：fudehe。語根 puda は女真訳語・人事門の“弗忒昧，送”に相当。欽定金史語解卷 11：“富德，令送也，卷五十九作蒲帶”。
- (7) 蒲_(並母)刺都(蒲刺睹、蒲刺篤) puladu。金史：人名“蒲刺都、蒲刺睹、蒲刺篤”。金史国語解：“蒲刺都，目赤而盲也”（目が赤く目が見えない）。満語：fulata(眼のあたりの赤い)。
- (8) 蒲_(並母)里(蒲烈) puli。金史：人名“蒲烈”。満語：fulu(すぐれた、ひいでた)。満洲源流考卷 11：“富魯，満洲語優長也。旧作蒲里”。
- (9) 蒲_(並母)盧渾(蒲魯渾、蒲魯虎、蒲魯歛) pulhun。金史：人名“蒲盧渾、蒲魯渾、蒲魯虎、蒲魯歛”。金史国語解：“布囊曰蒲盧渾”。満語：fulhu(ふくろ)
- (10) 蒲_(並母)輦(蒲里衍、蒲里演、蒲里偃、拂_(數母)捏、蒲聶、蒲涅) puliyen。金史：官職、部族名、人名。欽定金史語解卷 2：“佛寧，群也。卷一作拂捏，又作蒲聶，部銘。”。満語：

feniyen(むれ、あつまり)。

(11) 蒲_(並母)速椀(蒲速斡) pusuyon。金史卷 44：遼の地名“金初因遼諸抹而置群牧，抹之爲言無蚊蚋、美水草之地也。天德間，置迪河斡朶、斡里保(保亦作本)、蒲速斡、燕恩、兀者五群牧所，皆仍遼旧名，各設官以治之。……世宗置所七，曰特滿、忒滿(在撫州)、斡睹只、蒲速椀、甌里本、合魯椀、耶盧椀。”(金初、遼の諸抹に応じて群牧の所を置いた。抹は蚊や蚋が無く、水や草が十分な所を言う。天徳年間に迪河斡朶、斡里保、蒲速斡、燕恩、兀者の五つの群牧所を置いた。皆遼の旧目であり各々官を設けて之を治めた。……世宗の時に七つの群牧の所を置いた。特滿、忒滿(在撫州)、斡睹只、蒲速椀、甌里本、合魯椀、耶盧椀である。)。

遼史国語解：“蒲速斡，義與‘耶盧斡’同……‘耶盧斡’，興旺盛也。”。蒲速椀(蒲速斡)：契丹語からの借用語。

(12) 蒲_(並母)陽温 puyayun。金史：人名。金史国語解：“蒲陽温曰幼子”。満語：fiyangū(末子)。

(13) 蒲_(並母)鮮(蒲莧、蒲閑) puhien。金史：人名“蒲鮮、蒲莧、蒲閑”。日下旧聞考卷 4：膝、鹿皮“布希，満洲語膝也，又去毛鹿皮也，旧作蒲莧”。満語：buh(ひざ)。

(14) 仆_(滂母)散 pusan。金史：人名。金史国語解：“仆散曰林”。満語：bujan(林)。

(15) 仆_(滂母)鶯 puyan。金史卷 1：地名、悪瘡“還經仆鶯水。仆鶯，漢語悪瘡也”。満洲源流考卷 18：“佛葉，満洲語傷痕也。旧訛仆鶯”。満語：fiyartun(傷あと)。

語中の p

(16) 查刺合攀_(滂母) čara hapan。金史卷 24：地名“有居庸關，國言查刺合攀”。満洲源流考卷 18：“居庸關，國言曰齊喇哈藩。満洲語，齊喇，嚴也；哈藩，官也，旧作查刺合攀”。満語：hafan(官吏、役人)

中村：盤_(並母) 1 例、裴_(並母) 1 例、婆_(並母) 1 例、蒲_(並母) 10 例、拂_(敷母) 1 例、仆_(滂母) 2 例、攀_(滂母) 1 例、合計 7 種の漢字が女真語の表記に使用されています。このうち、並母字(旧濁音)は全て声調が平声で、当時の北方漢語では無声有気音 [p^h-] となっていたものです。滂母字は旧来より無声有気音 [p^h-] です。これよりみると、漢語音 [p^h-] で表記された女真語音は p であったとみてよいのでしょうか。当時 f であったはずの敷母の漢字が「拂」として 1 例使用されています。これは例外とみてよいのでしょうかね。

金代女真語に f はあったか

吉池：(10) puliyen が蒲_(並母)輦、蒲里衍、蒲里演、蒲里偃、拂_(敷母)捏、蒲聶、蒲涅とさまざまに表記される中の一つが、拂_(敷母)捏です。孫伯君(2004)はこの例によって、金代女真語には既に p > f の痕跡があり、最初期の変化は、後続母音 u の影響に依るとします¹¹。

¹¹ 「蒲里演」又對譯爲“拂捏”，說明金代女真語已經有 *p- > f- 演化的跡象，而這種演化可

もつとも、(10)puliyen に相当する音写漢字が出てくる金史と三朝北盟会編巻と太平寰宇記をみると次のとおりです。拂_(敷母)捏の例は1例のみで、心もとない出かたです。

金史：蒲_(並母)輦、蒲里衍、蒲聶、蒲涅。

三朝北盟会編巻 242 に引く正隆事跡：蒲里演。

三朝北盟会編巻 3：蒲里偃。

太平寰宇記巻 1：蒲聶。

太平寰宇記^{1 2}巻 175：拂_(敷母)捏。

中村：太平寰宇記巻 175 の拂捏が、どの程度論拠になるものか、判断は難しいという印象です。他に金代女真語の表記に f を利用した例はないのでしょうか。

吉池：孫伯君(2016;94)によると、漢語音 f を用いて金代女真語音を表記した例がもう一例あります。金史：gihuluwan “吉甫魯湾” (燕子城)が、女真譯語：“加渾温” (鷹)や滿語：giyahūn (鷹)に相当するとし、甫が hu に対応するとします^{1 3}。

中村：甫は非母 f であり、それが女真語の hu に対応しているようにみえるということですね。上の対応が正しいかどうか、その判定はやはり困難ですが、この漢字“甫”が誤記でないとしたならば漢語の非母字 f を利用して女真語音を表記していることはたしかです。しかしこれは、漢字音 fu を女真語の hu の表記に利用したというだけの話で、女真語に fu があったことを証することにはなりません。

吉池：もしも女真語に fu があったとしたならば、漢字音 fu を用いて女真語音 hu を表記する、などという混乱をもたらす表記法は避け、金史：胡刺 hula、鶻沙虎 hušahu、忽都 hudu などのように、漢字音 hu を用いて女真語音 hu 表記するのがふつうです。当時、女真語に fu がなかったからこそ、hu を表記するために、漢字音 fu を利用したということでしょう。われわれは、(10)の puliyen 拂_(敷母)捏の一例だけで重要な判断をするのは避けて、この例の解釈は今後の課題ということにしておきましょう。

p>f という音変化の要因

中村：ところで、孫伯君(2016;94)は、p>f という変化の初期において、後続母音 u の影響を受けたとしますが、その根拠がよくわかりません。举例 16 のうち、12 例が後続母音 u を

能最初受圓唇元音*u 的影響。」(94 頁)。

^{1 2} 太平寰宇記は北宋の樂史によって 10 世紀後半に編纂された地理書。

^{1 3} 《金史》用漢語非、敷母字與女真語對音還有一例，《金史》吉甫魯湾*gihuluwan “燕子城” >《女真譯語》加渾温 “鷹” >滿語 giyahūn “鷹”，“吉甫魯湾”與《女真譯語》“鷹，加渾温”，滿語 “鷹” giyahūn 相應，可推知 “甫” 對應的當是*hu，可以姑置不論。(94 頁)

持つものであることはたしかです。この挙例をみたときに、後続母音 u を持つ p が大半を占めるのはなぜか、との疑問を持ちました。しかし、このことによって直ちに、後続の u 母音が要因となって、その前の p が f になる変化が起ったとするわけにはいきません。

吉池：子音 p と母音 u は、両唇を丸めて突き出す調音であり、相性がよい。そこで、もともと女真語の p には u が後続する音連続が多かったということではないでしょうか。挙例に pu が多いのはそのためと考えていいかもしれません。p>f と後続母音の関係するのかわしいのか、はっきりしたことは分かりません。p>f という音変化の要因をどこに求めるか、これも今後の課題です。

bi, pi, fi の女真語から満洲語への変化の道筋

中村：孫伯君(2016)の209語中、16例に p がでてきました。209語は、たまたま書き残された女真語によるものであり網羅的でないため、たしかなことはいえませんが、p は後代の f に対応するようなので、p>f という音変化を想定して大過はなさそうです。いま問題となっている pi という音連続は見出だせないのですが、pi→fi を想定してもやはり大過はないでしょう。そうすると bi, pi, fi に、次のような音変化を想定すれば、女真語から満洲語への流れを簡潔に説明することができます。

bi→bi

pi→fi(動詞語尾の一部が pi として残る)

吉池：無圏点満文の音の詳細はわからないのですが、無圏点満文の前の女真語と、無圏点満文の後の有圏点新満文（“後”と言っても30年程度の差しかない）の音を見比べ、無難な無圏点満文の音を想定してみました。金代女真語、明代女真語、無圏点満文、有圏点新満文をならべれば次のようになります。

金代女真語の音		明代女真語の音		無圏点満文の音		有圏点新満文の音
bi	→	bi	→	bi	→	bi
pi	→	fi(一部 pi)	→	fi(一部 pi)	→	fi(一部 pi)

図1. 音 bi, pi, fi の時代別対応表

中村：明代女真語の“fi(一部 pi)”は漢字音の事実と合わないのではないですか。pi を表記する漢字音 [p^h-] は使用されていません。

吉池：pi は動詞語尾として現われるので少数です。前回、河内良弘・清瀬義三郎則府

(2002:95-96)によって確認したところ 34 例でした。明代女真語の資料である「女真館訳語」の「雑字」(単語集)には、たまたま現れなかったと想定しています。金代女真語で pi であったものの一部が、明代女真語にも pi として有った、と想定しても不思議はないと考えたしだいです。

中村:「満文原檔」の無圏点満文には文字 bi があり文字 fi はないけれども、無圏点満文の文字 bi が、有圏点新満文の bi と fi と pi に対応することも事実です。この対応をどのように解釈するかということですね。

なぜ文字連続の fi がないのか

吉池:無圏点満文に文字 fi がないということについて、次の二つの議論があり、このことについては前回確認しましたが再度提示します。

道爾吉(1983)(道爾吉・和希格(1983)¹⁴の前半は道爾吉氏担当で後半は和希格氏担当)は、無圏点満文の fa, fe, fo, fu はモンゴル文字の w+母音で表記されているので、満洲語の fi も、モンゴル文字の w と i を利用して wi とし、満洲語の fi を表記することができたはずである。そのようにはせずに、動詞語尾において -bi と -fi を書きわけないのは、-bi が「現在時態陳述式」(不完了終止形 -mbi に相当)と「提前付動詞」(完了連用形 -fi に相当)の二つの機能を表していたからであろうとします¹⁵。

早田輝洋(2011b)には次のようにあります。

「後代の {fi} は第 1 冊ではすべて (58) のとおり bi で表記されている。(逆は必ずしも真ではない。後代の {bi} も原檔では bi で書かれている。) 後代の {fa} {fe} {fo} {fu} に当る所は vau を用いて書いているのであるから、{fi} も vau の次に i を書くことで出来たはずである。それをわざわざ bi を用いている、ということは b が特に張唇狭母音の i の前で [p] で発音されていたことを思わせる。有圏点時代でも、一部の子音語幹だったと思われる動詞の連用形は {fi} ではなく {pi} である。」(77 頁)。

中村:道爾吉(1983)と早田輝洋(2011b)は、モンゴル文字 w と i を利用して文字 wi 、 -wi 、 -wi を作り、それを利用して満洲語の fi を表記することはできたはずである

¹⁴ 道爾吉・和希格(1983)『女真譯語研究』内蒙古大学学报・哲学社会科学版 1083 年増刊。

¹⁵ 在有圏点満文中把無圏点満文的一bi 詞綴都改爲一fi (fi)。爲什麼用一fi (fi) 来改正 bi (bi) 呢? 有不少人認爲, 借自蒙文字母的無圏点満文, 不具備表示唇齒音 f 的字母, 只能用蒙文字母的 bi (一bi) 来代表 fi (一fi)。實際上, 滿語中的唇齒音 f, 在無圏点満文中都用 wa (wa) 行字母所代替的。如:……【省略】……。這就說明, 清初滿洲口語里用後綴 -bi 表示最起號兩種時態意義, 即現在時態陳述式和提前付動詞詞綴。無圏点満文尚不健全, 還沒有巖格的正字、正音法、但在一定程度上反映了當時的語音實際。(47 頁)

が、そのようにはしなかったのは、満洲語に fi という音連続がなかったからであるとししました。われわれも同じように考えましたね。

吉池：それで、無圏点満文に文字 fi がないことについて、前回は二つの解釈の可能性を提示しました。

①bi のみを持つ満洲語方言 A と、fi のみを持つ満洲語方言 B があった。無圏点満文の基礎方言は A で、有圏点新満文の基礎方言は B である。

②bi と fi の両者を持つ満洲語方言 C があった。bi は古風な表現であり fi は新たな表現であった。無圏点満文の基礎方言は C であり、新たに満文を作成する際に、古風な bi によった。30 年後に有圏点新満文を作成するときには新風の fi によった。

中村：我々は、方言 A、B、C に相当するようなツングース語や満洲語方言は見出すことができず、古風な表現を予想することができる女真語を確認してみようということになったわけです。それによると、先に確認したように、bi と fi の在り方は、明代女真語と有圏点新満文とはほぼ同様ということになります。

吉池：明代女真語と有圏点新満文の音の状況がほぼ同様ということになると、その間にある無圏点満文（有圏点新満文とは 30 年程度の時間差しかない）の音の状況も、まずは同様であったと推定したほうが自然であり無理がありません。

中村：そうすると、無圏点満文には音として bi, fi, pi の三種があったけれども、それを、モンゴル文字を利用して表記する段において、文字 bi の一種のみを利用したということになりますね。

吉池：そういうことを無理なく説明することができればいいのですが。

中村：モンゴル文字に p を表記する文字がなかったので、bi と pi の両者をモンゴル文字 bi で表記した。これについては他の研究者もその可能性を指摘しています。問題はモンゴル文字 bi で fi を表記することについて理にかなった説明をすることができるかということです。

モンゴル文語における文字 w の用法

吉池：無圏点満文において、モンゴル文字 ᠪᠠ w を利用して wa, we, wo, wu を作り、有圏点新満文の fa, fe, fo, fu に相当する音を表記することができるならば、 ᠪᠠ w と ᠪᠠ i を利用して文字 ᠪᠠ wi-、 ᠪᠠ -wi-、 ᠪᠠ -wi を作り、それを利用して満洲語の fi を表記することはできたはずだ、というのが他の研究者および我々の考えでした。

しかし、このような考えは、理屈と解釈によって合理的にものごとを進めようとする近代の人たちの考えかもしれません。この考え自体を疑ってみる必要があるのではないのでしょうか。

中村：具体的にはどのようなことでしょうか。

「満文原檔」のモンゴル語文の文字 w

吉池：栗林均・海蘭(2015)¹⁶によって「満文原檔」中にあるモンゴル語文をみると、長い短いは不揃いですが、401行のモンゴル語文を得ることができます。その中に w を含む語を探すと、suwasdi(繁荣。サンスクリット語。文頭の挨拶 oum suwasdi sidam『オーム、繁荣 成就』に用いられたもの)4例、Güwendüi(人名。チベット人)1例です。網羅的な資料に依るものではありませんが、文字 w は、モンゴル語の常用語の表記に用いられるものではなく、借用語に用いられるもののようです。

孝経のモンゴル語訳の文字 w

中村：当時の「古典式モンゴル文語」の状況も知りたいところですが、残念ながら今われわれの手元に適当な資料がありません。やや時代と系統を異にするモンゴル文語として「先古典期モンゴル文語」の『孝経』（モンゴル語による漢語の訳）があります。先に、栗林均(2014)¹⁷に掲載された影印を扱いましたね。この資料における文字 W の用法はどのようなでしょう。

吉池：孝経のモンゴル文語における文字 w の使用は借用語に限られており、「満文原檔」中のモンゴル語文と同様です。文字 w は、漢語の「孔夫子」の訳として Kungwusi が 11 例、漢語の「文王」の訳として Wun ong が 1 例出てきます。

中村：やはり文字 w は借用語に利用され、wa, we, wu は文字連続として出てきます。wi という文字連続がありませんが、wi がないのは資料の制限による偶然でしょうか。

吉池：無圏点満文の作者達が参考にしたであろう、当時のモンゴル文語に、wi という文字連続があったか、それともなかったか。wi という文字連続があったとして、その使用頻度はどのようなであったか。それを知るには網羅的に資料にあたらずにはならず、手もとに僅かしか資料がない我々にとっては困難な調査です。そこで、ふつうには学問の対象にはなり

¹⁶ 栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター報告第 17 号）東北大学東北アジア研究センター。

¹⁷ 栗林均(2014)『孝経—モンゴル語古訳本』（東北アジア研究センター報告第 12 号）東北大学東北アジア研究センター。

にくい辞典を参照することにしたとおもいます。辞典は時代やジャンルを異にする資料から成り立っているはずですから網羅的ではありません。使い方によっては役に立つかもしれません。下手もとにある資料中の語頭に w をもつ単語をあげると次のとおりです。

辞典にみる文字 w の用法

吉池: たまたま手もとにあった『蒙文総彙』(1891)、*Mongolian-English Dictionary*(1995)(もと1960)、『蒙漢詞典』(1999)を参照しました。この三書の中の w を語頭にもつ単語、および bi であるが wi と対応する例を確認すると次のとおりです。

■ 『蒙文総彙』(1891)¹⁸

wa-16 例。wč-3 例(子音連続)。we-5 例。wi- 無し。合計 24 例

bi-であるが wi と対応する例

・ biidury-a 漢語: 映青石。満語: beiduri。

※*Mongolian-English Dictionary*(1995)に viidyrij-e (vi は wi に相当する) とあることより wi-と対応する bi-とみることができる。

■ *Mongolian-English Dictionary*(1995)(もと1960)¹⁹

wa-17 例。wč-1 例(子音連続)。we-2 例。wi-6 例。合計 26 例。

wi- 6 例(894 頁)は次のとおり。【】は対談者注記。下記ローマ字表記の vi は wi に相当する。

①viidyrij-e [=biidyrij-e, S. 【Sanskrit】vaidurya] n. Lapis lazuli 【西アジアに産する青い玉】

②vinai [S. 【Sanskrit】vinaya; translated into Mongolian as nomuyadxa] n. Discipline, manner of living.

③višai [=bišai, S. 【Sanskrit】vishaya] n. Object, range of sense, perception (chiefly Buddhist) .

④višnu [=bišnu] n. p. The Hindi god Vishnu.

⑤vivanggirid [=bivanggirid, S. 【Sanskrit】] n. Prophecy, prediction.

⑥vivanggiridle- v. t. To make a prophecy.

*⑥は、⑤vivanggirid + le(動詞形成接辞)よりなる動詞であろう。

¹⁸ 栗林 均(2010)『『蒙文総彙』—モンゴル語ローマ字転写配列—』(東北アジア研究センター叢書第37号)仙台市:東北大学東北アジア研究センターによる。

¹⁹ Lessing, F. D. et al. 1995. *Mongolian-English Dictionary*. third reprinting. Bloomington. もと1960。

※vi(wi)-の見出しのもとに、bi-とする語形も重複して出す。重複は4例ある。なお、wa-, wč- (子音連続)、we-にはb-との重複例はない。

- ①biidyrij-e
- ③bišai
- ④bišnu
- ⑤bivanggirid

■『蒙漢詞典』(1999)²⁰

wa-34例。wč-1例(子音連続)。we-5例。wo-1例。wi-6例。合計47例。
wi-6例(894頁)は次のとおり。

- ①wisa [名] 簽證【ビザ】
- ②wišai [名] 〈宗〉①根②境
- ③witamin [名] 維他命【ビタミン】
- ④widio [名] 録像機【ビデオレコーダー】
- ⑤wiwanggirid [名] 〈宗〉①意向②予言③教訓

bi-であるがwiと対応する例

- ・biidüry-e [名] 青玉

※*Mongolian-English Dictionary*(1995)にviidyrij-e(viはwiに相当する)とあることよりwi-と対応するbi-とみることができる。

- ・biwanggirid [名] 〈宗〉①意向②予言③教訓

※*Mongolian-English Dictionary*(1995)の見出し語⑥にvi(wi)-がある。

※『蒙漢詞典』(1999)の見出し語⑤にvi(wi)-がある。

中村：レッスンの*Mongolian-English Dictionary*(1995)は興味深いですね。wa, wč(子音連続)、we, wiのうち、biとの重複例があるのはwiのみです。しかもwi6例のうちbiとの重複例を持つものは4例あり、wiとbiの重複は少なくない。『蒙漢詞典』(1999)にwiは6例あり、そのうち1例はbiと重複するので、このようなwiとbiの重複は、*Mongolian-English Dictionary*(1995)だけにみられる特殊な現象ではないといえます。

吉池：モンゴル文語において文字wは借用語の表記に使用されるわけですが、wa, wč(子音連続)、we, wo, wiのうち、wiを持つ単語のみがbiとwi両表記を持っています。このことと、無圏点満文でfiという文字連続がなく、biという文字連続のみがあるという事実とどのよ

²⁰ 内蒙古大学蒙古学研究院蒙古語文研究所(1999)『蒙漢詞典(増訂本)』内蒙古大学出版社。

うな関係があるか、もしくは関係はないのか、説明が必要となります。

中村：無圏点満文の作成者が、当時の何らかのモンゴル文語に依って満洲語を表記したということは史書にあるのでその通りなのでしょう。どのようなモンゴル文語に依ったか。当時のモンゴル文語には、概略として、仏教經典の木版本のなかで整理された「古典式モンゴル文語」と、「満文原檔」中にあるモンゴル語文のような「世俗的な（非宗教的な）文献」があったとみることができます²¹。おそらく、無圏点満文の作成者が依ったところのモンゴル文語は、仏教經典の木版本のなかで整理された「古典式モンゴル文語」ではなく、「満文原檔」中にあるモンゴル語文のような「世俗的な（非宗教的な）文献」であったものでしょう。世俗的な（非宗教的な）モンゴル語文献に wa, we, wo という文字連続があったので、それを利用して満洲語の fa, fe, fo を表記したけれども、wi という文字連続はなかった。その代わりに bi という文字連続はあったので、満洲語の fi を当時のモンゴル文語にあった文字 bi で表記した、と説明するならば、それほどの無理はありません。

吉池：無圏点満文の基礎方言には、有圏点新満文の基礎方言と同様に、bi, pi, fi という音連続があった。しかし、無圏点満文の作成者が依ったモンゴル語文には、p を書くための文字はなく、また fi に適した文字連続である wi もなく、bi という文字連続しかなかった。そこで、文字 bi を利用して、音 bi, pi, fi を表記しすることとした。この考えにとって、都合の悪い資料が出るまでは、このように想定しておきましょう。

中村：満洲文字の文字表の検討からだいぶ離れました。今回はこれくらいにしましょう。次回も文字表に沿って子音文字の検討を続けます。

²¹ 前掲栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』参照。「『満文原檔』に収録されている47件のモンゴル語檔案は、満洲語檔案と同様、史料的な観点から当時の満洲とモンゴルの関係を示す一次資料として高い価値を有するものであるが、モンゴル語研究の観点からしても、極めて価値の高い、興味深い資料である。とりわけ、それらのモンゴル語檔案は、17世紀前半に作成されたものであり、当時のモンゴル語の使用状況を、モンゴル文字の字形、単語や接尾辞の綴り、語法等のすべての面にわたって、直接観察できる意義は大きい。そのモンゴル語は、モンゴル語史の分野では、同じ時代に仏教經典の木版本の中で規範化された「古典式モンゴル文語」に対して、それほど規範化が進んでいない「世俗的な（非宗教的な）」文献として位置付けることができるが、こうした文献資料のモンゴル語の実態に関しては現在までほとんど研究が行われていない。」(2頁)。